

平成三十（二〇一八）年度 日本東洋美術史の調査 研究報告

著者	中谷 伸生，日本東洋美術調査研究班，カラヴァエ ヴァ ユリヤ，高 絵景，田邊 咲智，末吉 佐久子， 西田 周平，曹 悦，？ 継萱
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	25
ページ	99-170
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018812

神戸海洋博物館「海洋文化の展示」について

邢 継萱

はじめに

博物館は、文化展示に関する場所として、大衆に過去の歴史を語り、入館者が展示場を回遊すると、人類の営みの似ているところ、違うところが見え、過去の歴史的沿革や生活状況を知ることができる。文化のアイデンティティと歴史認識を紹介するため、博物館展示には地域活動と博物館の関係が重要であると思われる。近年、博物館についての研究は益々重視されて、博物館に関する研究内容は、収集、研究、教育、展示などの博物館学の基本的な要素のみならず、博物館学以外の分野や学科にまで関連する。社会教育の場所と見られる博物館の価値をどのように一般大衆に伝えるかが博物館展示の出発点である。これも文化と一般大衆を繋げていく博物館の価値と思われる。世界の諸民族の社会と文化活動に関わる正確な情報と文物を選別し、また、学術研究の成果に基づきつつ、興味深い展示を提供する博物館は、「文化」という抽象的な概念を具象化する展示を通じて、入館者に「文化」を広く体験させる。神戸海洋博物館で展示されている海洋文化の内容は、海に関わる人間活動である。海洋文化とは「海」の地表空間に関係するあらゆる文化の現象を指し、「海」に関する日常生活、産業経済貿易、科学技術発明、人口移動、

社会組織、行政機関、文教活動、文学芸術、意識信念などの人間活動が含まれる。そのため、博物館で展示される「海洋文化」には、海洋に関連する空間生態、人間と地域関係、社会文化、文化現象、歴史的経験などが含まれ、さらにそれに基づいて発展した文化理論も含まれている。

神戸海洋博物館展示について

海、船、港の歴史と未来を体験できる博物館である神戸海洋博物館の



図1. 神戸海洋博物館の外観

外観は、船のような形をした大きな白い屋根を持つ帆船や海の波の特徴とする(図1)。神戸海洋博物館は「海から港から神戸が始まり、未来に船出する。」を当館のコンセプトにし、「神戸開港一二〇年記念事業」の一環として一九八七(昭和六十二年)年に開館された。館の前身は一九六三年に神戸港湾



図2. 博物館入り口の玄関ホール

振興協会が運営する中突堤船客待合所ビル内に設置された兵庫県登録の第一号博物館である神戸国際港湾博物館であった^①。この団体は一般の社団法人で、神戸港の振興策を推進し、神戸港の発展を促進する神戸港湾振興協会が運営する。

神戸は古くから天然の良港の歴史があり、博物館には船や港湾の構造、役割、先端技術、船舶の歴史などが展示されている。また、「阪神淡路大震災」により倒壊したメリケン波止場の一部を「神戸港震災メモリアルパーク」として保存している。

さらに、二〇〇六（平成十八年）以降、神戸港と共同開発した川崎重工業の企業博物館「カワサキワールド」も博物館で展示されている。

(1) 入り口

博物館の玄関ホールを見回すと人目を引くのは、一八一六年一月一日に神戸港開港のために礼砲を放ったイギリスの大型帆船ロドニー号の模型（全長十二メートル）である。また、玄関ホールの壁面を見回すと、古代から現代までの各種の船を浮き彫り細工で作っている。（図2）。

(2) 一階の展示室

静態的な展示方式で船模型を展示する一階の展示室には、帆船や貨物船の模型、船首の像、海上保安庁が使用する灯台フレネルレンズ、江戸時代の貨物船、イタリアのガンドラなど、日本国内外に拘わらず、古代から現代までの様々な船に関わる展示品を揃えている。

船の名前、型式、トン数、長幅、船種、建造地、年代を含む詳細な説明札を付けている船があるが、一部分の船の説明札では単に船の名前を書いているだけで、一般人にとってこのような解説は簡単すぎて、疑問が残るかもしれない。展示室には世界各地の友好港、都市関連に関する紹介を通じて、神戸港と他の地域の関係が見られる。一階の奥の展示室は、船舶の構造や仕組みについて画像や模型を通じて、船体の波に対する抵抗や揺れを軽減する装置、船頭の形、船用推進装置から解説する。また、この展示室では観覧者に船舶の未来の発展の様子を見せるため、未来の船舶技術と船舶の構造を構想図で呈している。さらに、この展示場には、神戸港の施設を解説する展示エリアも設置されている、日本人のみならず、外国の観客も神戸港の施設の運営を理解できる。

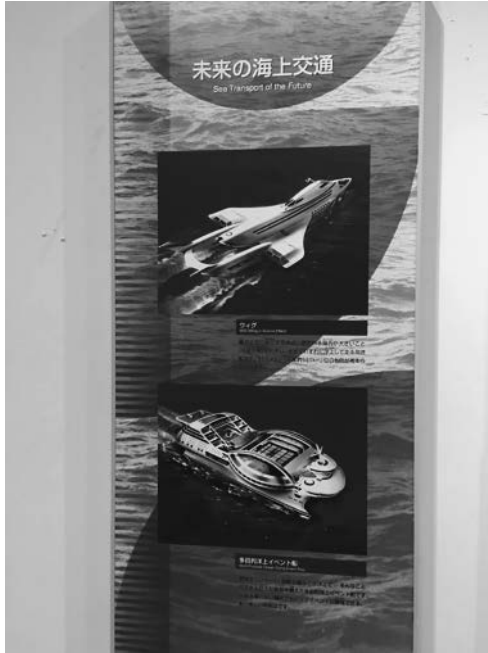


図4. 未来の海上交通構想図



図3. 船首の形状展示



図6. カワサキワールドの工業展



図5. 神戸港の世界航路図

(3) カワサキワールド

一階の別館のカワサキワールドでは、神戸で創業し、一世紀以上の歴史を持つ川崎重工の製作品が企業ミュージアムとして展示されている。川崎重工は大型船から新幹線、飛行機、産業用ロボットまで幅広い製品を造るグローバル企業である。展示場では、船舶の建造や船用機器の製造の歴史を通じて、川崎重工による資源や物資を供給する重要な技術を紹介しながら、川崎重工の歴史、エンジンの発展、企業製品を展示している。観客は陸海空の各分野で活躍する技術を把握している川崎重工の歴史と未来の展示から、企業に対する印象を深めることができる。

この展示場には、陸海空の各分野をテーマにした模擬装置を用いている。例えば、バイクのシミュレーターは、実車に乗ってサーキット約四分を走行する。また、陸・海・空の各テーマによってクイズとゲーム機が

あり、画面上の問題に答えることによって、観客が見学した後の知識度がどれほどあるかを知ることができる。

(4) 二階の展示室

神戸港の歴史と現状を解説する二階の展示室は、テキストと画像を通じて、昔から天然の良港を持ち、瀬戸内海の要道として栄えた神戸港の歴史を展示している。船舶の展示品、神戸港の建物の立体模型、歴史の画像から変化が続く神戸の「港」と「都市」の姿を観客に呈している。展示室に神戸港地区の景観を再現する機械があり、操作ボタンを押すと港区の位置や建設時期が表示される。

おわりに

神戸海洋博物館は、神戸港の地方的特色を示し、神戸港という地域を中心に展示している。神戸に関わる写真や映画の展覧を通して、歴史と技術から神戸の発展経緯を図解している。展示内容は神戸港をベースにして、港地区の発展だけではなく、神戸港の対外関係を含め、スケールに基づいて忠実に再現した建築模型を通じて、神戸港における現地開発の順序が見られる。世界的な角度から神戸港と世界の関係を把握し、神戸港の対外関係を理解することができるようになっていく。もう一つの展示の重点は船である。海洋文化の展示に関しては、船舶はそれらに影響を与える重要な要素である。商人が舟（船）を水上輸送の交通機関として利用し、人々の移動の際にも船は欠くことの出来ない交通手段であ

った。地方によっては、人間関係に影響を与え、さらに社会文化の影響にも及んでいる。これらは、科学技術と歴史の発展を構成している。神戸海洋博物館では古代船、サンパン、ヨット、近代的な漁船、客船、貨物船、軍艦、タンカー、海洋観測船などの模型が展示されている。日本の船舶のみならず、海外船舶の導入の一部紹介もあり、展示内容は非常に豊富である。まさに「海と港から神戸が始まり、未来に船が出る」という博物館のコンセプトにマッチしている。川崎重工業が併設した企業博物館は、この博物館の特別な部分として、川崎重工業の発展と歴史から神戸港の進歩を見ることができ、また、船舶技術に加え、エンジン、バイク、ロボット開発などの開発も非常に魅力的な展示である。これは神戸海洋博物館の特色と言え、博物館と地域をつなげるものと思われる。歴史から技術まで、地域の特性を持つ博物館であると考えられる。

注

- ① 廣岡茂裕、神戸海洋博物館・カワサキワールド、マリンエンジニアリング、二〇一八、五三巻、一号、p・八三―八五